

St.Mary's College Campus Letter

MADONNA

聖マリア学院大学キャンパスレター〔マドンナ〕

新型コロナウイルス
ワクチン職域接種

特別号

2021.12



新型コロナウイルス 本学での職域ワクチン接種



職域でのワクチン接種を推進する政府方針に対し、保健医療従事者を養成し、地域ファーストの方針も掲げる本学においては、早速参加方針を打ち出した。本学の様な小規模単科大学において大学拠点の職域接種事業に対応するには、通常業務とは異なる専門的対応と多大な労力を必要とするものであるにも拘わらず、命を守るという使命を持つ本学においては至極当然な優先事業であった。

6月上旬の文科省要望確認調査に即応し、同14日文科省事前ヒアリング（Zoom）、同15日厚労省へ申請（本学会場とした職域接種）と、即時の対応を要した。直ちに本学の学生や保護者の他、近隣の他大学や教育機関の学生や教



聖マリア学院大学学長
井手 三郎

職員のみならず、地域住民、商工会議所、外国人労働者にも接種計画を周知した。本学の特色を活かした学内施設と有資格者教員により、実施計画はスムーズに終了。7月上旬と8月上旬に1,200名に対して接種を完了した。

大学や、大学病院等を有する大学ではなからうか。本学のよくな小規模大学において、他大学等との連携や地域連携をもつて、短期間に大学拠点職域接種が準備可能となったのか興味があるとは、文科省担当者の素直な疑問であつたらしい。

文科省の「大学拠点接種等による新型コロナウイルスワクチン接種状況」（令和3年10月1日）によれば、全国の大学、短期大学、高等専門学校等の全1,179校全ての大学等からの回答において、大学拠点接種を行った拠点大学等は364校であつた。規模の大きな大学を中心に30%の大学が接種拠点大学になり得た。これらは煩雑な接種業務や事務等に対応できる組織の大きな

本学の理念と行動である、弱き者へ身を投げ打って出る姿勢。そして、地域ファーストの学内指針が、全教職員の一致した使命感を奮い立たせ、一般の困難な業務に立ち向かえた。顧みれば、今回の大学拠点職域接種事業は、全教職員にとってリスク管理事例の良き経験となつたと思う。また、本学教職員がプロフェSSIONナルであることを改めて確認できた嬉しい事業でもあつた。

コロナ禍の中で

—皆で一人ひとりのいのちを守る—

職域接種とは、地域の一般接種と異なり、ワクチン接種に関する地域の負担を軽減し、接種の加速化を図っていくため企業や大学等において職域（学校等を含む）単位での接種を行うものです。厚生省が挙げる実施要件としては（1）医師・看護師等の医療職の他、会場運営のスタッフ等、必要な人員



を企業や大学等が自ら確保すること。また、副反応報告などが必要な対応を行うことができること。（2）接種場所・動線等の確保についても企業や大学等が自ら確保すること。（3）社内連絡体制・対外調整役を確保すること。（4）同一の接種会場で2回接種を完了すること、最低2000回（1,000人×2回接種）程度の接種を行うことを基本とする。（5）ワクチンの納品先の事業所でワクチンを保管の上、接種すること。とありました。本学は学生数500未満の小規模校ではありますが、医療従事者確保は比較的容易であることもあり、本学の建学の精神に基づく地域貢献事業の一環として筑後地区の文系、工

学系の大学に参加を呼びかけた結果、要件をクリア可能であるとして申請致しました。しかし、準備の途中、接種期間間に約500名という大口のキャンセルがありましたので、職員一同地域の方々（特に一般接種の申し込みに戸惑っておられる独居高齢者の方、接種に不安をもつ障碍者の方々、近隣のカトリック教会の方々、地域在住の外国人の方々等）への呼びかけに奔走し、調整に苦慮しながらも無事2回の職域接種を終えることができました。特にベトナムの技能実習生の方々については、近隣市町村ではそれぞれ対応が異なっており未接種の方がほとんどであることを知り、聖マリア病

院の看護師であるベトナム人のシスターや近隣の日本語の堪能なベトナムの方々にはボランティアをお願いし、一般の方とは別日を設けて、集団で問診表の記録の仕方、問診の際の応答、接種および副反応観察時の通訳をしていただきながら（2回目には公共交通機関が不通になる豪雨の中ではありませんが）無事終了することが出来ました。ベトナムの青年たちとはコロナ終息後今後も国際交流の一環として本学との相互に交流を図ることを約束しました。この度の職域接種は接種者側の努力のみならず接種に来ていただいた方々との日頃の、また新たな信頼関係構築があったからこそと心より感謝いたしております。皆様、ありがとうございました。



聖マリア学院大学学院長
井手 信

新型コロナウイルス感染症への危機対応

—建学の精神と職域ワクチン接種—

2019年12月に中国の武漢で初めて同定された新型コロナウイルスが世界中に猛威を振るい、現在までに約480万人の尊い命が失われています。カトリック大学としての看護大学である聖マリア学院大学は、地域ファーストをミッションに掲げており、学長のいのちを守るた

めにと強い意向に基づき新型コロナウイルス職域接種を学生や地域住民の方々1,200名を対象に7月と8月に実施致しました。先ずは2回にわたるワクチン接種が無事に終了しましたことに感謝致します。

ワクチン接種を無事に終えることが出来たのは、準備の段階から終了まで一人ひとりの教職員が結束し、責任をもってそれぞれの役割を遂行したことにあります。それは、本学の建学の精神であるカトリックの愛の精神（他者へ向かう愛）の具現化とも言えます。また、新型コロナウイルス感染症対策

のために行動した地域の皆様との連帯にあります。聖マリア学院大学は小さなカトリックの看護大学ですので大規模なことはできませんが、接種にお見えになった地域の皆様から「ありがとうございます」「接種に行きたくても手続きがわからず、助かりました」という感謝の言葉を頂きました。また、言語によるコミュニケーションが困難なベトナムの皆様への接種に携わらせて頂いたことにも深く感謝いたします。

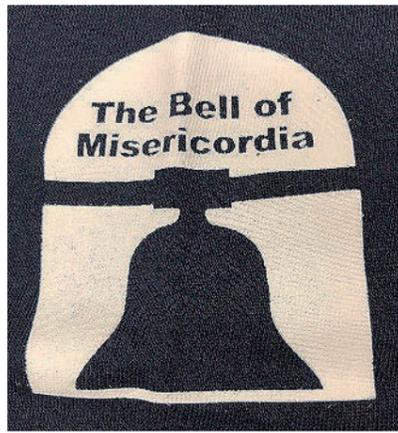
フランスの経済学者ジャック・アタリ氏は、「パンデミックという深刻な危機に直面した今こそ、他者のために生きるという

人間の本质に立ち返らねばならない。協力は競争より価値があり人類は1つであること」を理解すべきである。利他主義という理想への転換こそが人類のサバイバルの鍵である」と、2020年4月に放映されたNHKの番組「ETV特集 緊急対談、パンデミックが変える世界」海外の知性が語る展望」で語っていました。

他者のために、誰かのために何かできることは、自らの喜び、成熟に繋がります。聖マリア学院大学は、今後も建学の精神の下に教職員が結束し新型コロナウイルス感染症の危機に対処していく所存です。



聖マリア学院大学看護学部長
日高 艶子





受付

職域接種会場の2階の受付では、事前に接種予約された方の来場時の検温を行い、身分証明書にてお一人ずつ丁寧に本人様確認を行った後、予診票記載の確認を行いました。

注射前の緊張を少しでも和らげることができるよう、ゆっくりとした説明を心がけました。

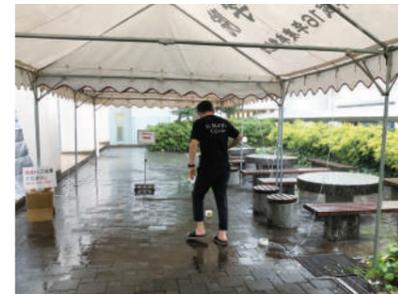
外国語対応のできる職員も配置し対応しました。



準備

国からの呼び掛けに応じ、本学は早々に職域接種(大学拠点接種)に申請しました。国や自治体などへ一つひとつ確認しながら、また医療従事者への先行接種経験がある聖マリア病院にも協力いただき入念に準備を進めました。

接種実施期間中(計2週間)は、各部門の責任者等が朝夕集まり、情報共有および諸作業の明確化を図りました。



接種

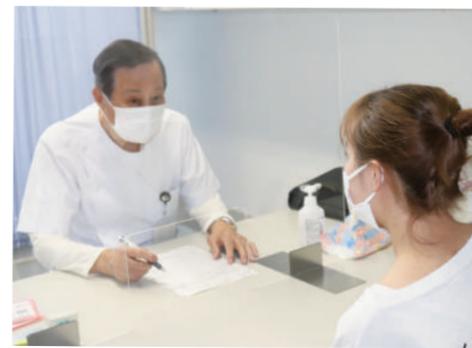
ワクチン接種会場では、接種ブースを3ブース設置し、対応いたしました。ブース内では、接種にこられた方々の予診票の最終確認を行い、ワクチンの接種を行いました。

また、mRNAワクチンは、振動や衝撃に弱く温度管理も厳密に行う必要がありました。よって、接種当日の薬剤の準備から接種終了までの薬剤管理だけでなく、学内でワクチンを保管している期間は、冷凍庫の温度の確認を毎日行っていました。



予診

ワクチン接種前の予診は、3つのブースを設営し、医師の先生方が毎日およそ230名の方の予診を担当されました。本学学校医の中山和道教授、学院長の井手信教授、河田産婦人科の理事長、河田栄人先生、副院長河田文子先生、聖マリア病院婦人科 杉山徹先生、聖マリア福岡健診センター長 黒岩中先生、久留米中央病院 消化器内科 酒井輝文先生が予診をご担当下さいました。





ベトナムの皆様への 接種

カトリック久留米教会に集わっているベトナム青年の皆様のうち、ワクチン接種を希望される20名の方が来学され、接種を受けられました。接種に際しては、聖マリア病院で勤務されているベトナムご出身の看護師、シスター・ソア先生、久留米市内の病院で介護福祉士として勤務されているベトナムご出身のガー様、ナム様が通訳、予診、受付のサポートをして下さいました。2回目の接種日には、大学への感謝のお気持ちとして、刺繍で作成された聖マリア様の額縁をご寄贈下さいました。言葉や文化が異なることに加えて感染症が発生し、大変な状況の中懸命に働かれていますことが伝わりました。出会えたことに感謝して、つながりを大切にしていきたいと感じたひと時でした。



副反応観察

ワクチンの接種を終えた方を15分又は30分の観察を行いました。接種後の副反応の発生に備え救急カートや簡易ベッドを準備し緊急対応につとめました。

幸いに、重篤な副反応もなく安全に接種を終了する事ができました。

片付け

2回目接種の終了後、診療所となっておりました建物の原状回復を行いました。豪雨の日もありましたが、案内看板等は安全を考慮し、毎日設置・片付けを行いました。これをもって今回の職域接種は事後業務を除き終了となりました。スタッフ一同、無事に終了できたことを喜ばしく思っています。



あとがきに代えて…



聖マリア学院大学 事務部長 石井 和弘

コロナワクチン接種の段階的政策スキームとして、医療従事者等への優先接種時期を経た後、接種の加速的拡大化を図る段階としての職域接種が開始される中、「大学拠点型」単独施設として本学がワクチン接種に取り組むことについては、大学規模やその実務対応に照らし、想定されるいくつかの懸念事項はあったが、カリック理念に基づく看護大学として、学長方針の下、学生のため、地域住民のために第一義に実施準備を進めることとなった。

実施に際しては、学内コンセンサスを経て、全学横断的プロジェクトチームを設置、その上で各種行政手続の進捗と併行し、実施計画の立案、医療スタッフの確保、接種希望者の募集とスケジュール調整を含めた準備に着手、本学校舎を接種会場（臨時の医療施設）として7月～8月に巨りワクチン接種を実施し、大過なくその責を果たすことができた。

この間、まさに献身的に従事いただいた学内外関係者に対し、衷心からの感謝を申し上げつつ、多少個人的な感情を吐露させていただくこと、裏表紙の記事として、どうかご容赦願いたい。

○接種申込者一人ひとり、並びに各団体へ個別連絡し、1,200人×2回接種、計2,400回分の接種スケジュールを調整してくれたスタッフ



- 炎天下の屋外、水分補給しながら笑顔で会場案内してくれたスタッフ
- 当日キャンセル分のワクチン廃棄を防ぐため、急な日程変更お願いに、快く応じていただいた方々、特に地場企業従業員の皆さん
- 感染予防のため館内各所を毎朝、丁寧に除菌、消毒してくれた清掃スタッフ
- 雨に濡れながら、来訪者用の雨避けテントを設営してくれたスタッフ
- 夜間、休日のワクチン温度管理に気遣っていただいた警備員の方々 等々

誌面には書ききれない方々へ、全く以って敬意を表する次第である。

編集後記

皆さんは大学に求められる機能についてご存じだろうか。2019年に文部科学省の中央教育審議会が出した答申、2040年に向けた高等教育のグランドデザインの中では、教育はもとより、高等教育と社会の関係として、「知識の共通基盤」、「研究力の強化」、「産業界との協力・連携」そして「地域への貢献」がキーワードとして挙げられている。

大学における地域貢献活動とは、すなわち個別大学が持ちうる知識・技術（知的資源）を、地域社会のために活用し、大学と共に地域社会も利益を得るための取り組みを指している。今回特集で紹介した新型コロナウイルスワクチン職域接種の取り組みは、まさしく本学が持つ医療の知識と資源を活用し、本学関係者のみならず、地域住民の皆様の生命にも貢献できた、またとない地域貢献の機会にならなかと考える。聖マリア学院大学はこれまで、「地域ファースト」をスローガンに掲げ、地域貢献活動を行ってきたが、これからも地域に根差した大学として、活動を続けていくことができると切に願っている。

**St. Mary's
College**
聖マリア学院大学

